

---

# 君に出会う冬の季節

IKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に出会つ冬の季節

### 【Zコード】

Z8270Y

### 【作者名】

IK A

### 【あらすじ】

季節は冬、全ての終わりが近づく  
雪の季節。最後の季節  
に、俺は大切な出会いをする。その出会いは、今までの俺の人生を  
大きく変え、そして  
一つの奇跡を起こさせる。記憶を失い  
続ける少女と、記憶を失わない少年の出会い。この冬  
ゆく雪の、溶けない記憶の物語が、始まる。『大切な記憶に、溶け  
ない奇跡を』

## まつりゆのプロローグ（前書き）

この小説は前作『君に出会ひつ春の季節』と同様季節シリーズ。

短い雪の恋が今、始まります。

## まじめのプロローグ

雪が降っていた

それはいつ止むかも分からず、ただ深々と降り積もり俺たちをまじろ色に染めてゆく。

氣づこじるには、俺の肩には雪が積もっていた。

白く染まる吐息。

寒い。けれど、足を止めとはいいけない。

だって俺は  
“約束の場所”  
そこへ向かわないと  
けないから。

傘も刺さざり、ただ深々と降り積もる雪の中を走り続ける。

まだ、間に合ひ筈だ。

まだ、助けられるはずだ。

まだ、奇跡を起こせるはずだ。

まだ、全てが終わった訳ではないのだから

初めて君に会った時から、様々な感情が俺の中を駆け巡っていた。

だから、この想いを忘れてたくないんだ。

この想いを、無かった事にしたくないんだ。

この好きと言ひ気持ちを、忘れてくないから。

『はあ、はあ、はあ、はあ・・・』

そして俺は、まじろ色に染まる道を走り続け、海岸に辿り着く。

季節外れの海は、潮の香りと、強い風が頬に当たる。

そう。この場所が、約束の場所。

俺は更に走り、“君”を探す。

まだ、君が覚えてくれているのない  
必ずここにいるはずだ。

『はあ、はあ、はあ・・・ さう、だよな』

そして俺が見つけたのは、一人の少女。

悲しそうな瞳に、雪のよつて白い肌。

弱々しいその姿は、今にも崩れてしまいそうだ。

『 なんで・・・貴方は・・・』

君は、驚く様にやう言つたね。

『俺は、記憶力が良いんだって・・言つたよな』

やう言つて、徐々に君との距離を近づける。

奇跡を信じて

¶

『  
君の名前を呼んだ  
』

俺は、君の名前を呼んだ

溶けてゆく雪があつても、俺は

溶けない奇跡を信じて

## まつりゆのプロローグ（後書き）

こんな感じのスタートです。

感想など、どしどしください！

## 名もなき少女との出会い（前書き）

今回の作品の主人公は前作同様の彼ですが、彼の性格やその他が結構変わっています。

まあそのへんは読めば分かりますし、お寿司。  
ではではどうぞ！――

## 呑もなき少女との出会い

中学3年生、冬。

現在1-2月。

俺は一人、外に出ないで家でのんびりコタツにミカンを食べて過ごしていた。

「今年も後30日ばかりとかあ～

そんな事を考えながら、クリスマスとかの予定を考える。

特に彼女もいない俺にとって、この冬は夏休みと何う変わりはない。

ただ今年は中学生最後の冬と言つことで、何か行動を取らうと考えた。

「・・・あそこに行つてみるか

俺はそう言つて厚着をして冬の外を歩き出す。

え？ 何で海かつて？

そんなことを思いながら俺が来たのは、何とこの季節にもなつて海だ。

「う・・・寒・・・」

マフラーと手袋をしても、この冬の寒さはびりにもならない。

「特に意味なんてないさ」

あ、すみません。調子に乗りすぎました。

いや、でもほんとに意味なんてないです。

海が家の近くにあるので気分で来た。

「」の季節に俺みたいに海にくる奴なんていないよな・・・

そんな事をボヤきながら、潮風吹き付ける冬の砂浜を歩く。

「・・・ん？」

だが、そこに一人の俺と同じ年くらいの少女がいた。

茶髪のサイドポニーで、胸も少しある。

青っぽい瞳は、まるで宝石の様だ。

その彼女は一人、海を眺めていた。

俺みたいな変わり者も居るんだなと少し関心しつつ、俺は一人でいる彼女に何となく声をかけてみた。

「ねえ、ヤレで何してるの？」

すると彼女は俺の方を向いて静かに答える。

「・・・海、見てた」

見れば分かるよ。

「何で、こんな寒い冬に？」

そう言つと彼女は疑問をうに聞き返す。

「冬に見ちゃ、悪いの？」

「いや、悪いって事は無いけど。海って普通は夏じゃないかなって思ったからね」

そう聞くと彼女は思い出す仕草をしてから答えた。

「私は、今が冬だって事……知らなかつた

「・・・え？」

意味が分からなかつた。

冬だつて事を知らない？なんで？日本人の常識じゃないか？

「ビリーハー」とだ？」

「そのままの意味。私は、今が冬だつたつて事を、今知つた」

「なんで・・・そんな・・・・」

知らないことには、学んでいないか、誰も教えてくれなかつた  
か。

その一つのビレかだと、俺は考えた。

「君は、学校に行つたことはあるか？」

15

「分からぬ。あるよつな氣がするし、無い様なな氣もある」

「・・・やうか」

答えが分かった。

学んでなかつたんじやない。

教えてもらえなかつたわけでもない。

その時の記憶を失つてゐるんだ。

つまり彼女は  
記憶喪失。

「君、名前は？」

「名前なんてない。あつても、すぐに忘れてしまつかり・・・私には、意味がない」

冷たい言葉だつた気がした。

悲しい言葉だつた気がした。

残酷な言葉だつた気がした。

だって、形あるものには全て名前が存在する。

それは、一生背負つて生きていくもの。

責任とか、罪とか、そんなものよりも長い時間付き合つてこゝのが名前だから。

だが彼女は違つた。

名前といひ、一生を共に生きるもの的存在を『意味のない』と名づけたのだから。

・・・俺は、何となべこの海に来た。

その時に出会つてしまつたのは、苦しい病を背負つた一人の少女。

記憶が無い少女に、俺は何が出来る？

答えは

一つだろう。

「だったら 僕が君に名前をあげるよ」「み

「え・・・」

そう。君と言う一人の少女の人生を、今からまたはじめさせれば良

い。

その始まりの場所が、この海なんだ。

君に、名前を与え、君に今から新たな人生を生きて欲しいから。

そのきっかけは、君の名前から。

「私の・・・名前を？」

「ああ。全ての始まりは、それからだ」

そう言って俺は辺りを見渡して、君に似合ひやつ名前を考える。

「うーん・・・それじゃー・・・」

そして俺は、君に一つの名前をさしあげた。

「君の名前は

『雪希』

」

「雪希……」

そう言つと君の瞳は、まるで光が走したよつて今まで以上に輝きを見せる。

希望を見つけた、その瞳。

「でも、この名前……忘れちゃう」

「大丈夫だ。俺が覚えてる、君の名前を俺は一生忘れない。絶対に

な

そう。もし君自身が忘れようとも、俺が覚えてる。

忘れたときは、また教えればいい。ただ、それだけの話なのだから・

「・・・絶対に、覚えててくださいね」

「もちろん。俺、記憶力には自信があるからさー。」

そう言つて、俺は君の手を引く。

「あ・・・」

「そんじゃ、挨拶も終わつた」とだし、こんな寒い所にいないで、俺ん家に来いよ！」

やつ言ひて俺は、雪希の手を引いて、走り出した。

『雪希、それは、例え雪が溶けてゆくように記憶が無くなつとも、  
決して希望を忘れてはいけないと囁ひ意味を込めて名付けた。

## おもなき少女との出会い（後書き）

さてさて今回のヒロインは『雪希』です。

このキャラ、『あかね色に染まる坂』に登場します、『長瀬湊』をイメージしてみました。

まあ印象などは一切違いますので、容姿がそれとほとんど同じですと言うだけです。

ですが名前などが一切違つのでキャラटレ弘つかからない上に自由に使えます（キリッ）

消えゆく、記憶と約束を残す物

彼女、雪希と出会いて俺は毎日彼女と初めて出会いたあの海で会つ  
ようになつた。

冬の寒さがありながらも、彼女に会う事は俺にとって一つの口課となつていた。

『雪希、おはよー。』

必ずその挨拶から始まる。

・・・けれど、

『・・・誰?』

君は必ず、やつて返す。

そう、君の記憶はたつた一日で全て消えるんだ。

それこそ、雪が熱で溶ける速度よりも速く。

君の記憶は、どうぞ消えていく。

覚悟は出来ていた。

君は俺を忘れることは、分かっていて、覚悟していた。

けれど、やがてはやがては、君のことは苦しげ。

『あ、『じめん。初めましてだね。でも、俺は君の事を知ってる、知り合いだよ』

だけど、諦めきれないから、次はそう言つてこる。

『・・・・、『じめんなさい。私、記憶が・・・』

『知ってるよ。消えてくんだろ?』

『ー?・・・『じめんなさい』

この会話は、毎日変わらない。

まさひロ、じだ。始まりに戻る・・・その通りだ。

君の記憶は、何度も何度も始まりに戻り、また全てを始まりから始めなければならない。

『うすれば良このか、じぱりへ見えながら、君に君の名前を何度も渡した。

『君は、『おみつ』だったんだ』

そう聞いて、次の日、またこの海で君と会つて同じ事の繰り返しだった。

だが、俺は一つの希望を見つかる。

それは、ほんの小さなこと。

だけど、それでも、賭けてみる価値はあった。

だから俺は次の日、彼女あるプレゼントを渡した。

『……これは？』

『口記帳。今日、今日あつた事の全てを書くんだ』

そう。中学生にもなつて口記帳とはどうかと思つていたが、これしか思い浮かばなかつた。

『もし記憶が消えてしまつなら、どこかに残せばいい。日記には、記憶を残す事が出来るんだ』

良い記憶も、悪い記憶も、辛かつた記憶も嬉しかつた記憶も全て記録出来る。

『・・・ありがと』

君は口記帳を、抱きしめるよつて持つた。

『・・・今日、病院』

君はそつと出して、歩きだした。

『病院に行く日』と『海に来る事』はじつかりと覚えているよつだ。

『あ、俺も丁度今日病院なんだ。一緒に行こう』

そんな嘘をついて、君と共に病院に行く。

俺は、知りたい事がある。

君が何故

記憶を失わなければいけないのか

。

そう言つての俺は医務室から出て、自販機で飲み物を飲んでいた。

『 そう・・・それじゃ検査を始めるわね』

友達と言つて、素直に嬉しかつた。

君は静かにそう答えた。

『 ・・・友達

『 あなたの彼氏さん?』

病院につくと俺は彼女の関係者として病院の医務室に入る。

女性の先生は俺を見てから彼女に言つ。

どんな結果が出るかなんて分からぬ。

けれど、最悪な事態にならないことだけ祈っていた。

その後、雪希は病室から出ていき、一人でふらりと去っていった。  
俺は彼女と話をしていた医師と話をした。

『彼女は・・・どうして記憶が消えて行くんですか?』

单刀直入にそう聞いた。

何よりも知りたかった、彼女の真実。

『……それは、興味本位で聞いていい話ではあります  
ん』

先生はそう言った。

確かに、彼女自身の事を聞くのは、興味本位のレベルで聞く」とじ  
やない。

・・・でも、

『俺は興味本位で聞こひなんて考へていません』

そう、興味本位で君の真実に触れるつもりはない。

ただ、寂しそうだったんだ。

冬の海をたつた一人で見つめている姿は、見ていられなかつた。

何も無い、空っぽの少女。

君を見た瞬間、俺の中で色々な何かが変わつたんだ。

失われゆくものが目の前にあって、手を伸ばせば救えるかもしれない。

手を伸ばさなかつたら、一生後悔するつて思った。

だから俺は君に手を伸ばした。

『俺は、彼女の忘れていたものを、全て覚えてあげたい。俺が彼女の記憶になつてあげたい。俺にとつて雪希は・・・大切な存在だから』

たのね

『・・・彼女に、雪希つて名付けたのは・・・あなただつ

『え?』

先生はやつて、全てを話してくれた。

『彼女は生まれつき記憶の容量に限界があつたの』

『記憶の容量?』

『パソコンに入るデータの量が決められている様に、人間にも入る情報の量は決まっている。まあその容量はPCよりも遥かに多いけどね』

そう言つて先生は俺を見つめて話し出す。

『けれど彼女は、その容量が極端に少ないの。だから脳は超えた分の記憶<sup>データ</sup>を削除して行つてるので』

『・・・』

俺はもはや驚きもしないで絶句した。

それだけ俺は、君の真実にショックを受けたんだ。

君の真実は、やつぱり重い。

『それで、その容量つて何年分の記憶に相当するんですか?』

『現在の彼女の年齢は15歳。そして覚えているのは13歳まで』

『一年分・・・730日分の記憶が容量オーバーで消えていっている。』

『彼女の脳は、崩壊させないために覚えた事を睡眠と呼び時間の中で消去していくの』

じゃ、覚えてもらひないと扱われて消去されていく……のか。

『……けど、最近彼女はある事を必ず覚えているの

『え・・・』

『……『雪希』って単語。きっと名前なのだらうな、  
これは彼女の本当の名前じやないわ。なのに彼女は雪希と書かれた単語  
を覚えて……忘れなかつた』

雪希・・・か。

『どうしてなんですか？』

『……私は私の予想だけれど、彼女自身の覚えている記憶と  
書かれたの中で不要な記憶を削除して、現在の中でもつとも必  
要な記憶を保存させたんじやないかと思つわ』

それだけ、雪希と書かれた名前は大切なのか……

『彼女の話はここまで。その他の記憶は、彼女……雪希  
さんから聞いて』

『はい。ありがとうございました』

『いいえ。あなたは、彼女を救つてあげられる。だから、  
いつも助けてあげる』

『・・・はい』

そつ置いて俺は、家に帰った。

』・・・

私は一人、部屋で彼から貰った日記を見つめていた。

ここに書けば、忘れても・・・残る。

私と言ひ存在を・・・残せる。

『タイトルは何にしよう?』

そう思いながら、ペンを持つ。

そして私は、何となく思いついたタイトルを書いた。

『アラスカの旅』としての希望

私が雪希と書いつな前になつた事から始まる。

この日記は、雪希と書いつな前の私が書くから、私の日記。

そして私は1頁田にいつ書いた。

初日。

私は、私の記憶を残して、覚えてくれる人ができました。

そしてその人は、私に名前をくれました。

この日記に、私は約束と記憶を書きます。

これで  
忘れないはずだから。

それが恋といつても（前書き）

この小説、案外内容を考えるのが難しい（――）  
とにかく皆さんのが感想が欲しいです。

よろしくお願ひします。

それが恋といつても

彼女、雪希と出合つてはや数週間。

俺達はいつもの海で待ち合わせし、海で会つたら街に出たりした。

それは、田記に書くことが増えてくれれば良いになつて思つたからだ。

そして現在、12月23日。

明日はクリスマスイヴ。

中学生最後のクリスマスが近づいている。

『なあ？ 明田さ、俺の家に泊まらないか？ クリスマスパー  
ティーでもやらない？』

俺はそつぱつと、西は少し考えて頷いた。

『よし。それじゃ明田、またここに集合な？』

そう言って俺たちは約束して共に帰宅する。

家に戻ると、俺は自分の部屋を見渡した。

『少し汚いか・・・』

明日は女が来るので綺麗にしないとな。

そう思った俺は部屋の掃除を真剣に行なつた。

・・・てか、どうしてこんなにワクワクしてんだろう？

むしろ部屋みて嫌われないか不安がるべきだと思つが・・・

でも・・・やっぱ心のどこかで、雪希が来てくれるのを嬉しいと思つ。

まあ初めての女友達だしな。

そして今回のクリスマスで、彼女が心の底から笑顔になれば良いなって、俺は思つ。

そのためには、色々頑張らないとな。

そしていつの間にか彼女の事を考えながら、掃除は夜まで行われた。

雪希 Side

『・・・』

家に帰った私は、日記に今日彼に言われた事を書いた。

明日のクリスマスイヴと一緒に過げると言つもの。

一体どんなクリスマスイヴになるのか、とても楽しみ。

・・・あれ？

ビックリして楽しみなんだろう？

ただ一日過げるだけなのに、ビックリして心臓がドキドキするのか分からぬ。

この、嬉しいような、ちょっと苦しみのような感覚は・・・何だろう？

でも・・・嫌いじゃない、この感覚。

明日が・・・楽しみだな。

『早く、明日にならないかな・・・』

そう言って、冬の夜空を見上げる。

『あ・・・雪』

空を見上げると、雪が舞い散っていた。

『綺麗・・・あの人も、見てるかな・・・』

俺は掃除を終え、夜空を見上げた。

『お、雪だ』

残り少ない今年に降った雪は、美しく・・・そして儂く見える。

どんなに降り積もっても、いつかは溶けて消えてしまつ。

『・・・出来れば、明日の一日のことは、忘れないで欲し  
いな・・・』

それは、叶わない願い。

だけど、諦めきれないから。

俺はただ、奇跡を願つてゐる。

あつと今も消えゆく記憶に苦しんでいる彼女を・・・助けたいから。

『二の雪・・・君も見てるかな・・・』

そして、翌日　この日、12月24日は俺たちにとって、とても大切な一日になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8270y/>

---

君に出会う冬の季節

2011年11月27日19時56分発行